

# 届け 世界の果てまでも

令和3年5月25日

No. 12

文責 校長 飯久保一男

## 苦手なことに向き合う②

前号に続いて、子どもたちが苦手なことに向き合うことについて考えてみます。子どもが親に苦手なことを相談してきたとき、親はどのように対応したらいいでしょう。



### ☆ 話を聞いて不安を和らげる

子どもの話をじっくり聞いて、その気持ちを受け止めてあげることが大切です。話を聞いてもすぐに解決とはいかない場合の方が多いと思いますが、話を聞いてあげるだけでも不安が和らぐのは、大人も子どもも一緒です。子どもが苦手なことを打ち明けてきたら、まず話を聞いてあげてください。そして、どうしたらいいか一緒に考えてあげる姿勢が大切です。

### ☆ 「ちょっとだけやってみようか」と声かけをし、「意外とできたじゃん！」と成功体験をもたせる

苦手意識があるものを、始めからやり直してみようというのは難しいこと、または、辛いことです。そこで、「ちょっとだけやってみようか」と声をかけて一緒にやってみようような親の姿勢があると、子どもは抵抗感がなくなります。前号でも書きましたが、子どもの苦手は「苦手だと思っているだけ」という場合も多いものです。それは、周りの「できないね」「苦手だね」「〇〇ちゃん是可以するって」といった声が原因の場合があります。この場合は、思い込みを取り除けば、「意外とできた！」という場合が少なくないようです。鉄棒が苦手なら、「ちょっとだけぶら下がってみよう」など、九九がなかなか覚えられなかったら、「一緒に唱えてみようか」などの声かけが効果があります。

### ☆ 最後まで寄り添う

ハワイで行われる“ホノルルマラソン※”は制限時間がなく、参加者が走る意志がある限り、スタッフが待っていてくれるマラソン大会です。

※ホノルルマラソン…時間制限を設けていないこと、大会当日に満7歳以上の健康な人なら誰でも参加できることもあり、健康づくりのために参加している一般市民ランナーや、フルマラソン初参加のランナーも多いマラソン大会です。

苦手なことを「やりなさい」と押しつけられ、一人でやるのは、大人でもつらいことです。苦手なことだからこそ時間がかかり、迷いも生まれます。そのときに、そばで励ましてくれ、待っていてくれ、辛さや厳しさを理解してくれる人がいるとがんばれます。例えば、子どもが算数の宿題の問題を解き終わるまで、そばで見守ってくれる親がいたら、これだけで子どもは安心して取り組みます。

子どもに苦手意識が芽生えるのは、脳科学的に見ても自然なことです。しかし、正しく向き合えば克服できる可能性があります。子どもが自分で苦手なことに向き合えるように、子どもを理解し、子どもとともに苦手なことに向き合ってくれる親の存在は心強いものです。



### 給食の好き嫌いから始まったイーゴ少年の排便習慣

私が小学生のころ（母校は小笠原小学校です）は、小笠原小に給食室があり、そこでつくられていました。つい数年前までそれは続いていました。私が通った幼稚園は弁当持参でしたので、給食を食べるのは小学校に入学してからが初めての経験でした。



その当時、給食にはよくポテトサラダやマカロニサラダが出ました。私の母親のせいだと思っていますが、私はそれまで、マヨネーズ味のものを食べたことがありませんでした。そのせいで、ポテトサラダやマカロニサラダのおいしさが分からず、苦手な給食メニューになってしまっていました。

当時の担任は、給食を残すことに厳しい担任で、全部食べ切るまで給食を片付けることが許されませんでした。（当時はこういう指導が普通でした…）他の子は食べ終わって片付け、昼休みになって遊んでいても、私はサラダとにらめっこをしていました。最後には給食室に「残してゴメンナサイ」と謝りに行かされました。

これを何とかしなければいけないと考えた1年生のイーゴ少年は、小さいノーミンでこう考えたのでした。

「お腹がペコペコになれば、苦手なサラダも食べられるかもしれない」

「そうだ、そのためには、朝、しっかり💩をしていけば、お腹が減るはず！」

基本的な生活習慣も怪しかったのだと思います。当時はチビのヤセでしたので、食欲があまりなく、お昼に腹が減るという習慣もなかったように思います。そして毎朝、家の便所（当時の我が家の便所は家の外にありました。溜まると「おつり」がくるやつです。）に、こもってうなったのでした。

親に相談していないことに問題ありですね。いつ、マヨネーズ味のものを食べられるようになったのかは覚えていませんが、このことは妙に覚えています。これを繰り返すうちに、毎朝の排便習慣が身に付きました。それから50年経った今でも、朝が来るとちゃんともよおします。



アメリカの作家、ジョン・C・マクスウェルさんのコラムです。

わかりやすくするために、加筆・削除・修正をしてあります。

ある美術学校でのエピソードである。

陶芸の授業のとき、教師はクラスを2つに分けた。

1つのグループには、作品の「量」によって、採点をすると告げた。

もう1つのグループには、作品の「質」によって、採点すると告げた。



採点の日、興味深い事実が明らかになった。

優秀な作品は、すべて「量」グループから生まれたのだ。

「量」グループの生徒は、たくさんの作品をつくっていく過程でいくつも失敗し、そこから学ぶことで、いい作品を次々と生み出すことができた。

しかし、「質」グループの生徒は、完璧な作品について理屈をこねるだけで、手を動かさなかったため、成果として残ったのは、壮大な理論と作品になりそこねた粘土だけだったのだ。

あなたの目標が、ビジネス、スポーツ、芸術、人間関係など、どんな分野であろうと同じこと。

進歩する唯一の方法は、「トライ・アンド・エラー」をくり返すことだ。

そして、そこでの失敗を経験という財産に変えていくのだ。